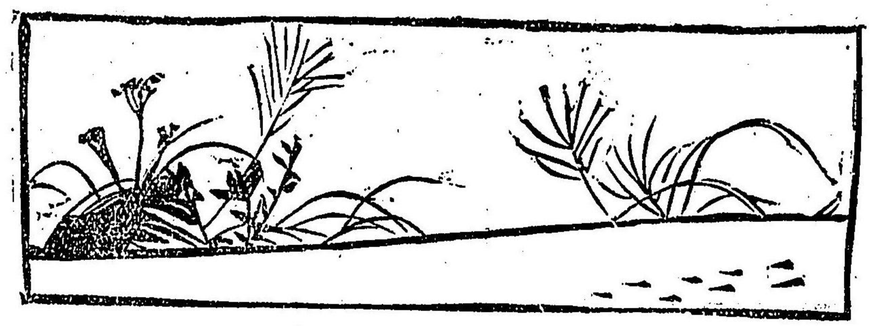
切して鍋中に投ず、何ぞ知らん、菜中にありし蛇寸寸に切斷せられて飯臺に上らんとは、驚て大象同じく食するに美味常に絶す、既にして折れにもならんとするに際し、風外典座を招く、奕堂室に入れば風外著頭に蛇の頭を挾みて、之れは何物ぞと問ふ、奕堂も之れにはギョットせしが、流石は禪門の活作略、直に之を手に受けて「これは羅蔔の頭でござい」と、平然として一喫し去る、風外奕堂の後姿を見送り莞爾として曰く、「今朝も奕堂奴に先手を越されたワイ。

文山の畫賛（小便無用）

佐々木文山能書を以て名を知らる、かつて紀の國屋文左衛門、賓井其角等と芳原某樓に遊びしに、樓主春の山に櫻花を畫ける金襖を出して文山に賛を乞ひければ、文山筆を取りて「此處小便無用と書きたり、主人心中其の無作法を恨み一座白らけて見えければ、其角進みいで、其の下へ「花の山」の三字を添えたれば、「此のところ小便無用春の山」の名句となり、一座更に一層の興を添へたりといふ。



十返舍一九借衣にて年禮す

十返舍一九常に赤貧にして年始の衣服なし、即ち一策を案じ出し、一月元旦朝湯を調へおきて、早々年禮に來りし某へ頻りに入湯を進め、客の衣を解いて浴室に入るや、その脱ぎたる衣服をそのまま借着して内を飛び出し、客の未だ風呂よりいでざる先きに、近所五六軒の年禮をすます。

豐原國周十三兩にて草双紙を買ふ

豐原國周かつて淺草廣小路の露店にて、田舍源氏十冊程を見出し、直段を問ひしに、一朱と二百文なりと答へしかば、乃公は日本一の國周なり一朱に負けよと怒鳴りしが、其の本屋も亦乃公も日本一の石井清次郎なり、縣直は言はずと言ひ返へしぬ、國周こは面白き男と思ひ、然らば日本一の國周が贈玉を見よとて、十三兩ばかり入れたる紙入を投げ出して、草双紙を持ち去りたり、然るに本屋も奇人にて、其の紙入を其の儘

封じおき、己が臨終の時、之れを國周に返却せしといふ。

市川柳雪の病氣見舞

小田原藩中に柳雪といふ醫師あり、かつて同藩士某の病氣を見舞ひしに、病中ながら他の客と對讃中なりし故、別間に控へぬ、此の時七八歳の子供出て來りて、前なる茶菓子をとりては次の間にゆきて食ひ〳〵するのを、一つ懲かしてやらんと、二本の小指を口に入れ、人指指と巨指とにて眼を張り、鼻を怒らして障子の隅にかくれ、障子を引きあけし途端に、ウッと言つて突き出てたるに、こはそも小供にはあらで主人なりしかば、流石の柳雪も暫し戸迷しが、其儘座敷を舞ひあるけり、主人も餘りの事に呆れはて、、柳雪何をするぞと言ふ、これを幸に柳雪其の前に平をつき「ハイこれがその眞の病氣見舞と申すもので御座ります」。

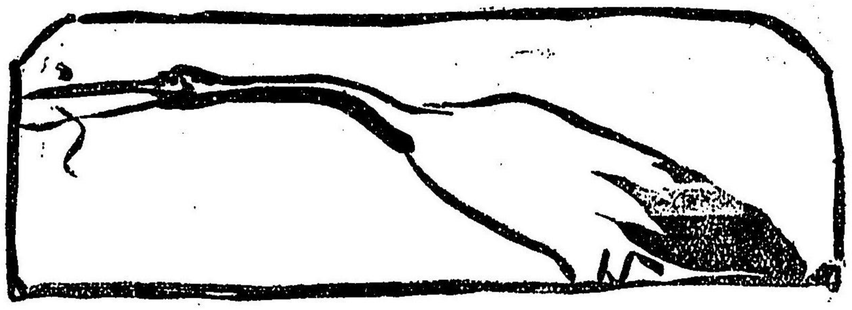
獨園壯士の膽を奪ふ

獨園一日門を出でんとせし時、壯士五六人門を擁して曰く、我等獨園和尚に面會せんとす幸に傳へよ、獨園曰く獨園は老衰なり、何の用かある、壯士逡巡久しうして曰く、和尚あるが故に我が願の願を遂ぐること能はず、今日將に乞ふところあらんとす、獨園曰く何の大事ぞ、壯士曰く、我邪蘇教を奉ずるもの、期するところは佛教を撲滅するにあり。故に和尚の一命を乞はざるべからず、獨園聲に應じて答へて曰く、事甚だ容易なり何ぞ速かに斬らざる」と、壯士愕然として手を空しうしてかへる。

蜀山の狂歌

蜀山あるとき吉原某樓に招かる、主人思ふよしありてか鐘馗の幅に薊を生けおきたれば蜀山

をのれやれ花なればこそ生けておけ
鐘馗の前に鬼薊とは



荒木村重切先の饅頭を食はんとす

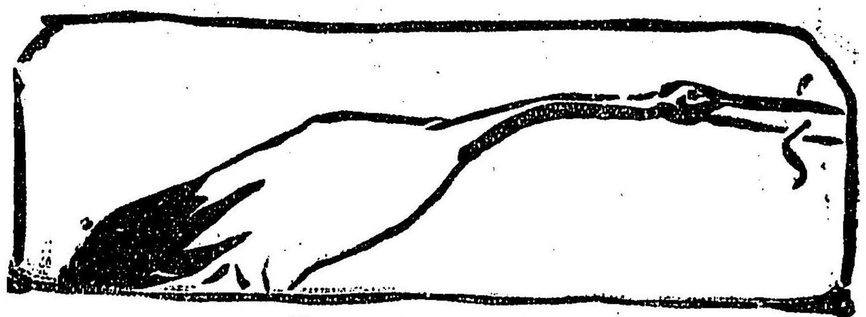
荒木村重初めて織田信長に逢ひし時、信長村重の膽力を試みんと思ひ、突然佩刀を抜きて傍にありし饅頭一個を切先に貫き、村重の面前に差し出したり、村重少しも憚せず、直に進み出て大口開きて其の饅頭を食はんとせしかば、信長笑つて曰く「好男子攝津十三郡郷が意にまかす」とて、即時に攝津守に任ぜらる。

畫家千虎の俳句

名古屋の俳人松浦羽洲、かつて畫伯川崎千虎を訪ひ、書畫帖に揮毫を依頼するとて、帖の継ぎ目の處へ、此處へ何にても云々と附箋して持ちゆきければ、千虎は揮毫の序に、

土間よりも寒し疊のしき合せ

と俳句を添へて送り返したれば、月洲大にはぢ入りたりといふ。



西有穆山釋迦の畫像に贊す

ある人西有穆山に釋迦の畫像に贊せんことを乞ひし時、

あなたは悉多太子かわしや知らねども、三千年の其の昔、衆生濟度に御難儀をなされしことは身にしみて、いくら末世の隋僧でも、聞いては安氣に眠られず、ましてやあなたの光にて着るものも食ふものも伽藍まで、穢してをつてえらい顔、道心なさは何とまー、さぞや呆れてござんせう、南無釋迦牟尼佛。

獨園の放縱

獨園若き時、行ひ放縱にして常規を逸す、甚だ酒を好み、時に大醉して泥の如く、高聲俗歌を謠ひつゝ歸り來る、大拙大に怒りて之を罵るも、獨園怙として意に介せず、直に横臥して鼾聲雷の如し、然れども大拙寂滅の後は堅く禁酒を守りて、一滴をも口にせざりしといふ。

源頼政美人を撰む

源頼政怪鳥を射るの功を以て宮女菖蒲の前を賜ふ時、數多の宮女を同裝して並ばしめ、以て頼政をして自ら菖蒲を撰ませ給ひしかば、頼政

五月雨に池のまこもの水まして
いづれ菖蒲と引きぞわづらふ

と詠じ、菖蒲をして莞爾として笑はせ、遂に之れなりと指して菖蒲を得たりと。

ノウ、イエス博士井上甚太郎

井上甚太郎は久しく農商務省商工會議員として、遠く歐米の諸國を巡遊せしが、常に通譯の二人三人連れざる事なかりしを以つて、自ら外國語に通ぜずとも、さのみ不便を感ぜざりしかば、英語一つ勉強せし事もなかりき、然るに或る時通譯悉く外出して、氏一人ホテルに殘り居りし時、其の地の新聞記者來訪せしかば、氏は其の何の

職業、何の用事ありて來りしかをも知らんながら、お定まりの握手だけはすませたれど、元々「ホワット、ドー、ユー、ウオント」の一つ言へざることとて、唯其の顏をみつめ居るに、客は拙り兼ねて話しの火ぶたを切り出したれど、氏は何が何やら陳紛漠紛の、否、然りと答ふるのみ、一刻千金の思ひして、ひたすら通譯のかへり來らんことを待ちたり、やがて通譯のかへり來りしかば、漸くその客の新聞の經濟記者にして、日本の經濟近況を聞きに來りしこと判明せしかば、氏はそれより大得意になりて、喋々數千言を費したるが、それより其の記者は氏を綽名すに、ノー、イエス博士と名づけたりといふ。

得庵の打電傳三郎の返電

鳥尾得庵死ぬるの前日、何と思ひけん、大坂の藤田傳三郎に打電して曰く「病氣危篤、百萬圓持つて見舞に來い、早く來なければ、一足先へ行つて三途の川て持つ」と、傳三郎の返信に曰く「百萬圓は餘り少ない、露西亞から償金が取れたら十萬億圓持つ

て行く、十萬億土て待て」と、得庵之を見てフフ、と笑つて死す。

秀吉くんらんかんけんを解せず

長曾我部元親の家臣某、主人の使にて秀吉に對面せしとき、秀吉之を見て、汝の主人は鳥なき里の蝙蝠なりといひしも、某其の何の意たるを解する能はず、然れども直にくんらんかんげんと答ふ、流石の秀吉も之れは解する能はずして默す、某歸國の後之を元親に語る、元親其の意を問ふ、答へて曰く、臣もとより蝙蝠の意を知らず、然れども知らずとて赤面してかへらば、臣のみならず實に主君の恥辱なりと存じ、秀吉の側に軸掛あるを見て出鱈目にかく答へしのみ。

一休の機智

一休和尚の尚ほ幼なりしとき、或る者寺の什寶なる蛇の目の茶椀を碎き、師に叱らるべしといたく悲しむを、一休身が引きうくべしとて、其の茶椀を其懷に入れて師

のかへりをまちしが、師のかへるを見るや、突如問ふて曰く、「生あるもの遂に如何」「死し去らん」、「何が故に死すや」「生あればなり」「師よ蛇の目の茶椀破れたり」。

彦左衞門の鰹節の鼠

大久保彦左衞門かつて仙臺侯の邸に至りし時、侯左甚五郎作の鼠を出して示されけるに、傍にありし猫之を捉へんとし故、一座其の巧妙に服せしも、彦左衞門はこれ珍とするに足らず、余の家には數匹ありと言ひければ、侯翌日彦左衞門の邸に臨み、その鼠を見んことを望み給ふ、彦左衞門則ち鼠數匹を出せしに、傍にありし猫競うてくわへ去りぬ、何ぞ圖らん此の鼠は彦左工門が猫の好物たる鰹節にて造りしものならんとは。

蜀山人の仲裁

蜀山人の隣りにすまひし、かるといふ女、ある夏門邊に水まきつゝありし時、誤つ

て通りかゝりし足輕の足に水を飛ばせしかば、足輕大に怒りて、かるがわびするをきかざるを見て、蜀山走り出てて足輕に向ひ、これにてゆるせとて、

行きかかる來かかる足に水かかる
足輕怒るかるかなしがる

猿丸太夫の狂歌

猿丸太夫或る時內裡の近邊をよぎりける時、宮女達歌よまんとて太夫を召し入れければ太夫足のうらのあかぎりを撫てつゝ、

あかぎりも春は越路にかへれかし
冬來て足の浦にすむとも

河鍋曉齋の一筆鴨

河鍋曉齋得意の一筆鴨に、正價百圓を附して繪畫共進會に出品す、係官怪みて其

の價高きに失するなきやを問ふ、曉齋笑つて曰く、貴官の言極めて理なれども、此の百圓は單に鴨一筆の價にあらず、實に我が腕熟練の價なりと、開會に及び、菓子商榮太樓の主人之れを奇とし百圓にて購はんとす、自らも其の不廉なるを思へる曉齋、私かに五十圓にて賣らんと言ふ、主人聽かずして曰く、此の畫若し五十圓ならんには我れ豈に之を購はんやと。

晉之助の小便價五十石

加賀藩士白石晉之助といふもの、或る時北野參詣の途に於て五人連の荒武者に逢ひ、我等が我れから喧嘩を吹きかけて、九州武士の手並を見せんなどといきまくを、謀略にて追ひ拂はんと思ひ、態と大聲あげて笑ひながら、拙者は北國者にて武術の心得なければ、北國者の法を以て、いざ御相手仕らんとて袴の裳を高々と揭げて、今や拔かんと刀の柄に手をかくる五人の前へ、龍吐水の如く小便を注ぎければ、五人の者共は其の膽に恐れ、且つ如何なる奧の手あるやも知れずと思ひ、「汝の如き發狂者は敵人

に足らず馬鹿〳〵」と罵りながら逃ぐるが如くたち去りぬ、後此の事藩主の耳に入りて音之助は五十石を加増せられしと

原坦山某女と通ず

原坦山昌平黌にありし時、某女と通じ僧老を約す然るに某女多情にして約を破りしかば坦山之を殺さんと欲して其の家に行く、某女不在なりしを以つて歸るを待つ、無聊に困しみて案頭の書を讀むに、大に女色を戒むるの語あり、坦山大に悔いて再び某女の門に近かず、後年人に語りて曰く、老衲年四十一に至るまで、淫慾の念を離脱すること能はざりしと

白石神たらんことを望む

新井白石幼時兒童等と遊びつゝありし時、或る人彼等兒童の望みを知らんと思ひ、若し此處に不思儀の神樣ありて、何なりとも汝等の好むものを與ふべしと言はば、皆

々何を望むぞと問ふ、或る者は甘きものをと言ひ、或る者は凧、或る者は獨樂などゝ先きを爭うて答へしが、白石最後に悠然として言ふやう「吾れは人々に望みの通り物を與ふる神樣となりたし」と。

龍闌の大食

龍闌かつて某居士と共に名古屋に赴かんとし、行にのぞんで二升飯を食ひ盡す、某大に驚いて師の如き大食にては旅亭の飯のみにては腹に充ざるべく、又旅亭も宿泊を辭まんと言ひければ、龍闌笑つて曰く、途中にて飯を喫するの煩を避くるのみ、食はんとならば大千世界も一口に呑却せん、二升の飯の如き我れに於て何かあらんと名古屋に達するまで三日間、遂に一回も食はず。

仙崖黑田侯の菊を芟る

黑田侯苦心して後園に菊花を培養し、之を愛惜せらるゝこと姫妾もおよはず、或る

時侍臣謀て一技を折りしに侯の怒りに觸れて閉門せられしかば、某之を恨みて割腹せんとす、仙崖之を聞き走つて之を止め、一夜雨に乘じして後園に忍び入り、鎌を以つて盛りの菊を芟り去りぬ、時に侯後園の物音をきき、出て之を見て大に憤り刀を握りて其の故を問ひ給ふ、仙崖平然として答へて曰く、「かくの如き草も芟りておかば何時か何かの塵草にもならん」と、侯之を聞きて大に悟り、それより又菊を養はず。

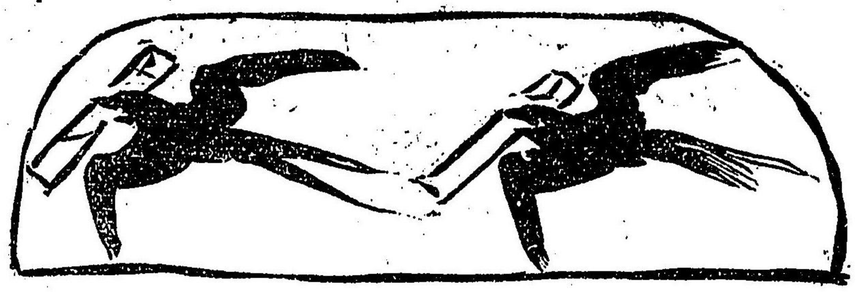
狂歌師の桂園一枝評

ある狂歌師、桂園一枝に「けるかな」の結び多きを可笑とて

けるかなと言はれけるかなけるかなと
いふより外はなかりけるかな

文晁富士越しの虎を畫く

某侯文晁の畫才を試みんとて、或る時文晁を招きて、汝が富士越しの龍は既に見たり、願くはは今度富士越の虎を畫けと命ぜられければ、文晁直に筆をとりて、小供が虎を畫きし紙鳶を飛ばすの圖を畫き、之れに遠景の富士を添へたり、此處に於て某侯文晁の畫才に服す、

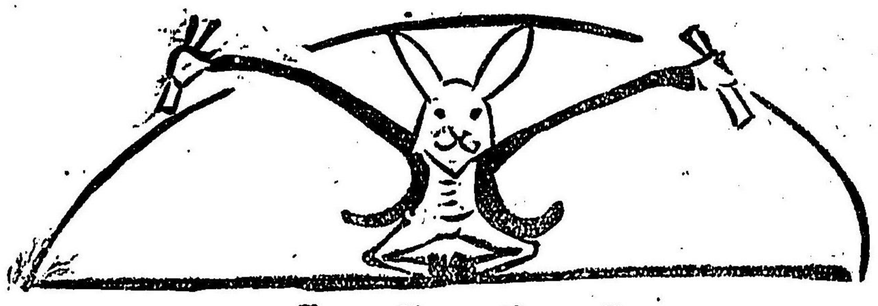


山岡鐵舟雲井龍雄を階下に投ず

雲井龍雄名を佐幕にかり、不逞の徒を集めて事を天下に起さんとするや、一日山岡鐵舟を訪うて之れが黨首たらんことを請ふ、鐵舟默然として敢へて答へず、此處に於て龍雄怒りて足下の如きは木石と異なることなしと放言せしかば、鐵舟聲を勵まして曰く、今や王業緒につき、まさに昇平の春に逢はんとす、何を苦んで不軌を企てんや、汝の如きは天下の賊なりと、蹴然起つてその襟をつかみ、之を階下に投げ出す。

一休木鉢賣りに戲る

一休和尚或る時、茶店に休らひけるに、片目なる木鉢賣りの翁、傍らに來りて、い



ろ〳〵の戯れ言ひて打ち興じければ、和尚

夜叉が一度に來たか木鉢賣り

あいた眼もありあかぬ眼もあり

とうたひしかば、木鉢賣は和尚が麻の法衣の下に綿入着れるを見て

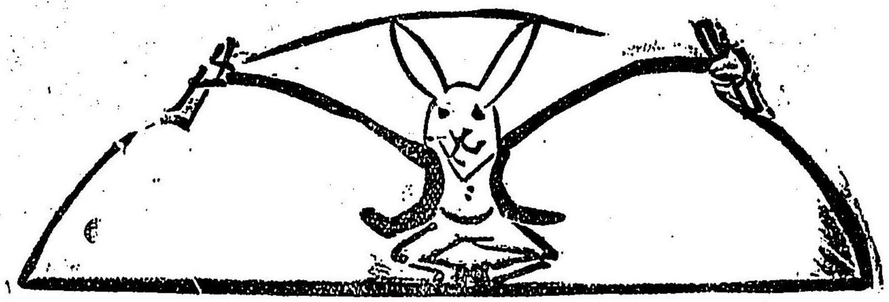
夏冬が一度に來たか和尚樣

上は帷子下は綿入

葛飾北齋鷄を走らして畫を作る

葛飾北齋德川將軍に召されて曲畫をなせし時、一鷄を持ち來りて其の尾藍を浸し、足に臙脂を含ませて紙上に走らす、一條の靑藍洋々たるの間、斑々たる赤點紅葉浮び、龍田川の幽趣自然に全幅に橫溢す。

仙崖踏臺となる

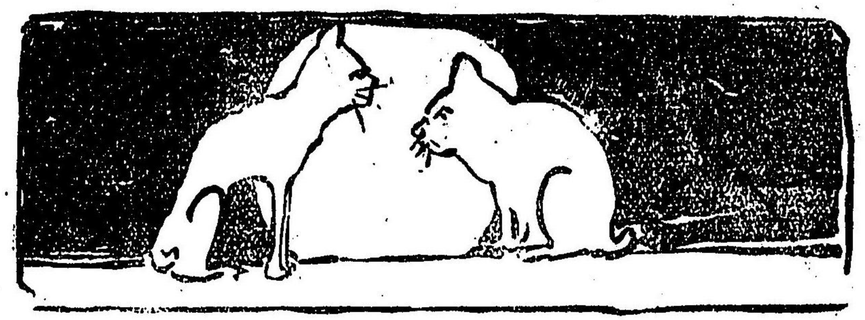


聖福寺の僧徒の中、夜間ひそかに寺塀を越て、博多の花街に遊ぶものあり、仙崖之れを知りて彼等を戒めんと思ひ、一夜彼等の歸る頃を伺ひ、攀塀の踏臺をとり除きて自ら其の跡に蹲まりて待つ、僧之を知らずして塀を攀ぢて內に入らんとするに、前に据えおきたる踏臺なし、怪みながら四邊を探り、僅かに一物の踏臺となるべきものを得、辛うじて塀を下りて後、之を熟視すれば何ぞ、圖らん仙崖師ならんとは、僧徒等恐懼してなすところを知らず、これより一山また花街に遊ばず。

坦山と得庵との途上問答

原坦山一日出でて烏尾得庵を訪ふ、途にして得庵又來りて坦山を訪ふに會す、得庵先づ車より下りて弓を引くの狀を擬す、坦山之れに應じて一圓形を空中に畫き、遂に一語を交へずして去る。

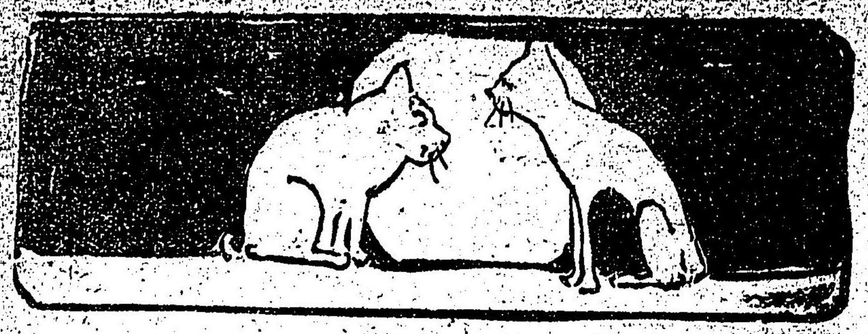
梅謙次郎寬人を烟にまく



滑稽百話

戸水寛人は一種の奇骨家にして、人を熱罵酷評して毫も憚らず、穂積兄弟の兩博士の如きも、「彼等は大の無氣力者だ、少しばかりても學問した癖に、權門に阿附すると人を畑にまきたることあり、そは梅が彼の「民法要論」を著はしたる後、程經て寛人に逢ひし時、彼れは寛人が民法要論のことを言ひ出さんとするを察し、「イヤ彼樣な杜撰なものが閲られるものかね、我れながら能く麗々と出版したと思ふよ、あんな本を買ふ位なら小説本を買ふた方が氣が利いて居る、それに何しろ一方は條約改正だの、内地雜居だのと云ふ場合だもの、到底悠々としたことは出來もせず、マア眞の際物だからやりはやつたが、實に今では後悔する」よ、と悉く寛人の言ふべきことを述べたてし故、流石の寛人却つて呆氣に取られ「イヤ君自身は大層貶すがアレハ左樣でもないよ」と、全然位地を顚倒して、寛人は受太刀一方を勤めたりといふ。

碩儒渥美三平の頑固

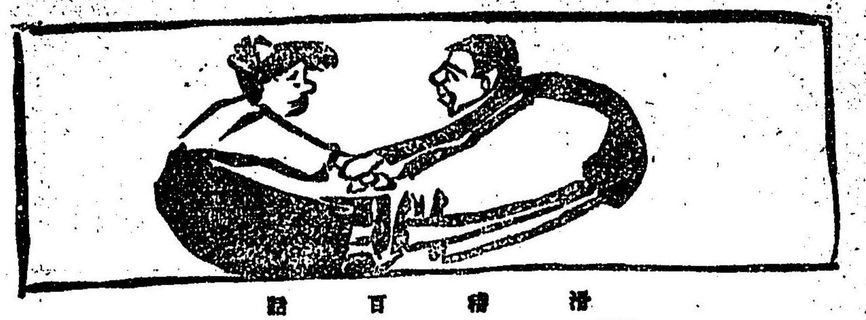


滑稽百話

土州の鴻儒渥美三平、去る頃細川潤次郎を便つて上京せしかば、潤次郎は三平を我が邸へ留めおきて、猶き所へ手の屆く如くに世話を燒きしが三平は又頑固一點張りの男、酷暑といへども机へ向つて膝も崩さず、潤次郎之を見て、さては三平食客と云ふ所より遠慮して斯くの如きか、然らばとて下婢に言付けて金三拾圓を盆へのせ、「先生も此の暑氣では定めし御難儀、些湯治にでもお越しなされたが好からうと、主人よりの申付て失禮ながら之を」と差し出せば、三平赫と怒つて「細川と言ふ男は道を知らぬ奴、こんな所には居りともない」と、盆の金を突きかへして其の儘立ち退きしが、程經て潤次郎が探し出せし時は、三平麻布の見るかげもなき裏店に周易の行燈を掛け、潤次郎を見て「イヤ斯ういふ所でなくては思ふ存分學問は出來ぬ」、澄し居るに、流石の潤次郎呆然として、開いた口塞らざりしといふ。

津田休甫の「虎に毛拔」

畫家津田休甫諸國を漫遊して大坂に至りし時、栗東寺の寺僧喜び迎へて其の新造の



戸に畫かんことを乞ふ、休甫即ち筆を揮ひて一大虎を畫きて去る、寺僧休甫の去るに及んで其の畫を熟視するに鬚なし、休甫再び來るに及び寺僧告ぐるに此の由を以つて す、休甫驚きし體にて先日勿卒筆を走らせたれば、其の鬚を忘れたるなりとて、直に筆をとりて畫くを見れば鬚にはあらで虎の傍らに一個の大毛拔き。

神官環溪を苦しむること能はず

かつて神佛二宗を合して大教院を設け、神官僧侶各一人を擇んで輪番に二宗に關することを行はしむ、偶環溪の輪番管長たるや、神官等ひそかに環溪を苦しめんと欲し、一神官をして環溪に傳へしめて曰く、神社の祭典を行ふに當りて、僧侶が法衣を着し、珠數をつまぐり、我等と共に死したる魚を捧ぐるは不可なり、故にかかる時は僧侶も同じく烏帽子直垂を着すべしと、環溪之を聞きて驚く色なく、そは面白し、僧侶は死人にさへ手を觸るるものなれば、魚の死したるを捧ぐる何の不可かあらん、また烏帽子も直垂も着すべしそのかはり、子等が寺に來らん時には髮をそりおとして法衣を着

けしめんと言ひければ、神官等其の裏をかゝられたるを驚き、再びこのことを言はざりき。

蓬洲の頓智

蓬洲かつて行脚して某驛を過ぐ、たま〳〵曹洞の雲衲寺に百人ばかり、驛路の側に整列せしが、蓬洲が臨濟の行脚なることを知り、路を遮つて、一句なくんば通過を許さずと戲れしかば、蓬洲笠を兩手に捧げて「兩岸猿聲啼不住、輕舟已過萬重山」と、吟じ終つて走過し去りぬ。

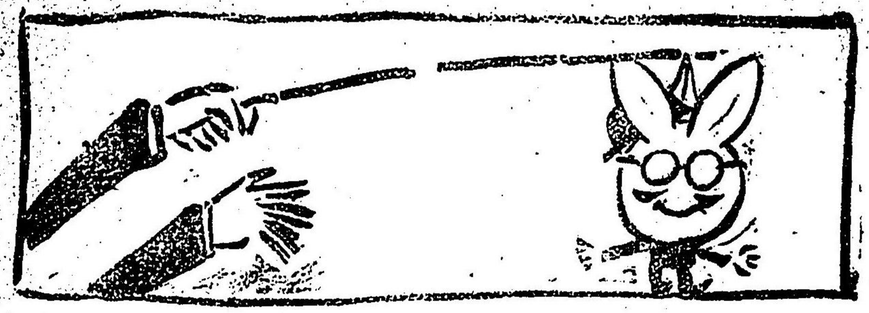
白隱舟子を驚かす

白隱かつて舟行せしとき、同舟の人皆月に對して談ぜしが、白隱一人甘醉して眼を開けば舟まさに津口にあるに、舟子に問うて曰く、いまだ纜を解かざるか、はた半程に泊するかと、舟子罵つて曰く、咄何等の睡眠漢ぞ、昨夜纜を解くもの多かりしが、

多くは颶風のため轉覆して、全きを得るものは此の舟のみ、一舟の人皆神に祈り佛に禱り、我も亦髻を斷つて海神に誓ひぬ、然るに子一人偃臥して鼾聲雷の如し、我れ多年海上を住來するも未だかつて子の如き膽大の臭禿奴を見ず」と、よつて白隱起つてあたりを見れば、滿場の吐物惡臭紛々として鼻を襲ひ、脚を著くるに處なきの裡、衆皆手巾を以て頭を縛し、面色宛然土の如く、右に倒れ左に顚じて氣息奄々たり。

市川海老藏の洒落

芝居役者市川海老藏、大坂に趣かんとして澤村宗十郎に暇請にゆき、まさに辭らんとして玄關に至りし時、誤つて放屁一發したれば、取りあへず「ぷつと出て顏に紅葉をおき土產」といひしを、宗十郎「あまり臭ささに餞別もせず」かくて大坂に至りしに、或る人其の名聲を傷けんとて、彼れが生來下肢部弱きを知りて、「東より腰ぬけ海老が上り來た」といひしを、海老藏「頭ばかりて唯つた千兩」と返答したれば、評判いよ〳〵增りて大當りなりしと。



明兆少時不動像を畫く

明兆幼時經卷を事とせずして畫に耽る、師の之を戒むるも聞かず、一日不動像を畫きしが師の還り來るに遇ひ、驚いて之を隆下に隱す、然るに其の火焰勃々として起ち て掩ふ能はず、師之を見て其の妙なるに感じ、遂にまた咎めず。

方潭伏見人形を携へて講堂に入る

名僧方潭若年叡山にありて佛學の講筵を聞く、其の說くところ佛門深奧の妙理にして、之を了るには實に二年有餘の日子を要す、されば聽衆一人減じ二人去りて、竟には殘るもの只方潭一人のみとなれり、よつて講師一日方潭に向ひ、聽者餘りに少ければ暫らく休講すべしと言ひければ、方潭答へて聽者の少なきを憂とし給はゞ、明日は數多の聽者を誘ひ來るべしと、翌日講師今日こそは方潭が數多の聽者を誘ひ來りしなるべしとて講堂に入れば、滿堂閒として聲なく、只方潭のみ一人數多の伏見人形と相

默して座するを見、人を惑弄するも甚だしとて喜ばざるの色あり、此處に於て方潤膝を進めて言つて曰く、これ迄來りし人々は皆無精神のものなれば、何れも大切の講義を聞き終らずして逃げ去れり、かくの如き輩は何ぞこの伏見人形と異ならんや、拙僧一人なりとても精神を鞏固にして師の道を傳ふるを得ば、師の勞空しからざることなれば、何卒休講せずして講義を了せられたしと、講師之を聞きて大に感じ、遂に方潤一人のために全卷の講義を了せりと。

一休の即答

蜷川新左衛門親當、ある時一休を困ませんと思ひて、念佛稱號は「なむあみだぶつ」とも「なんまいだ」とも亦「なむなむ」とも言ふが、其利益にかはりなきものにや、と問ふ、一休聞かざる眞似して突然蜷川殿と呼ぶ、新左衛門之れに應ず、又新左衛門殿と呼ぶ、又之れに應ず、親當殿と呼ぶ、新左衛門又又之れに應ず、一休呵々大笑して他を語る。

物外近藤勇を敗る

物外かつ近藤勇門下の數十人を擊ち伏せしとき、勇進んで一手を試みんことを言ふ、物外おそれたる樣にて地に伏し、先生は斯道の鬼神なり、雲水僧などの敵すべきにあらず、ゆるし給へと乞ふ、勇さかず、よつてやむなく鐵如意を持つて立つに、勇また、凡そ武技を闘はすには皆其の器あり、和尚も竹刀、或は木槍のうちにてその欲する所を撰めと言ふ、物外余は僧侶の身、武器をとるべからず、此の鐵如意にて可なり、勇之をも許さず、物外然らばとて頭陀袋より二個の椀をとりいだし左右の手に握り、いざいづれよりなりとも突き給へといふ、勇大に怒りて一突にて倒さんと思へど寸毫の隙もなし、まどろみもせず半時ばかり睨みゐしが、隙やありけん、力をこめて腕をも通れと突き出すを、物外飛鳥の如く身を開くを同時に、二個の椀にて槍の蛙卷を押へぬ、勇これをはづさんと引けど押せど動かざること盤石の如く、流汗淋漓として瀧の如し、軈て物外一喝と共に椀をはなしけるに、勇忽ち後に倒れて槍は遙かに飛びぬ、之れよ

り物外の名一時京師に鳴る、

晦巖の神通力

晦巖一時京師に入り、諸宗の學林僧堂を叩き、憤然として放吟して曰く、五條城邊首を廻らして望めば、東西南北愚僧多しと、又かつて伊達侯春山、今日の宗匠神通力を有するものありや否やを問ふや、我れ二六時中頭上に化身佛を出して休まず、唯汝盲目にして之を見るを得ざるのみと。

明兆の廉潔

足利義持深く明兆を愛し、屢之を召して畫を命じ又其の欲する所を言はしむ、明兆曰く、一衣一鉢吾事足れり、財貨官爵之より望むところにあらず、只近時東福寺の衆僧好んで櫻樹を植ゆ、恐らくば後世に至て精舍變じて遊場とならん、願はくは台命を下して之を伐らんことをと。

越溪三條公を一呑にす

越溪かつて太政大臣三條實美公と某處に相會す、某三條公を越溪に紹介して曰く、「此の御方が太政大臣三條實美公です、」越溪胡坐のまゝ公に會釋して曰く「　アあなたが三條公かね、布告の尻尾ではをりをり御目にかゝるが、眞實の三條公には今日が始めてだ」と、言ひ終つて呵々大笑す、

座頭秀市の輕口

座頭秀市なるもの、或る時或る所に遊びにゆきて「あまりざれごと言うて眠くなつた」といひしを、傍らにありし姙婦の「盲目者も眠いことがあるものか」と戲ひければ、「そなたは姙して腹のふくれをれば、飯を食ひたいことはありますまい」聽て夕方に至りて秀市「最早日も暮れかかりたる樣なれば御暇申す」と言ひしかば、主人「眼の見えぬものが日の暮るるを急ぐとは何故か」と問ふ、秀市取りあへず「日が暮れま

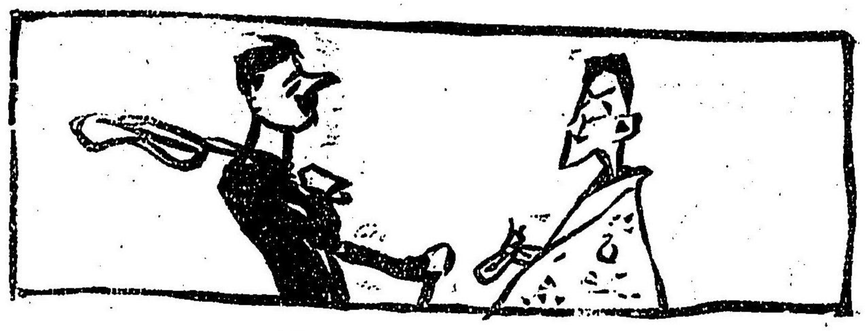
すれば、眼明きが衝き當つて困ります」。

奕堂女郎屋にて朝齋を所望す

奕堂少時遊方して尾州熱田を過ぐるや、嚢を傾けて一妓樓に遊ぶ、其のまさに辭し去らんとするや、草鞋を穿ちて揚口に腰打ちかけ、「今までは御客であつたが、これからは雲水だ、どうか朝齋の供養に預りたし」と主婦に乞ひ、悠々腹を鼓して而して去る。

脇坂七兵衛裸體にて娘を嫁がす

金澤藩士脇坂七兵衛、其の一人娘を同藩の某方へ嫁がせしが、始め媒介者來りて、決して御心配は御無用なり、衣服の如き拵へは好まず、只裸體のまゝにて御當人を貰ひたしと、言ひたればとて、期日に至り婿方へ土産物一つやらず、嫁にも何一品持せずして婿の家へ遣はし、且つ言ひける樣へ豫ねて裸體のまゝの御所望なれども、途中



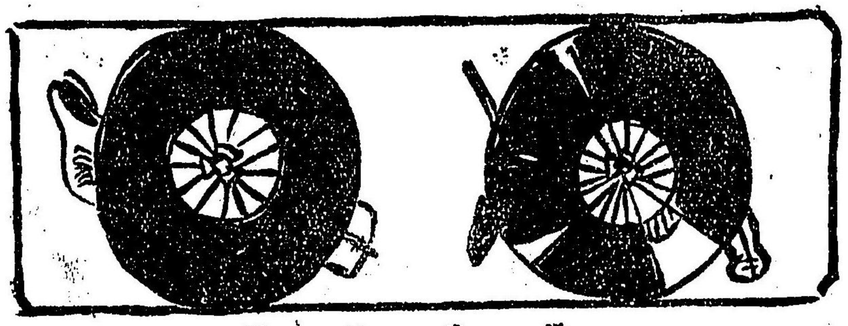
は有合せの衣服を着せしめたれば、何卒其の衣服は直に御返へしありたし」と。

南洲無三の喝に怕る

南洲吉井友實と共に福昌寺無三に參す、無三二人が經世の大器なるを知り、痛棒熱喝常に惡辣の手段にて之に接す、二人或る時相語つて曰く、老漢の室に入れば直に痛棒を喫し、中を逃るゝに由なし、今日は庭前にありて商量し、老漢棒を下さば藪直走り去らんと、ゆきて椽下に立ちて參叩す、無三這の生意氣者奴と一喝す、聲百雷の一時に鳴るが如し、二人恐れて謝せしが、南洲後日舊を語る毎に、必ずこの事に及びしといふ。

赤羽四郎生徒にもつ

赤羽四郎が未だ出世せざる前は、大學豫備門の教師として、ナッタルの自然地理を教へしことありしが、或る時の試驗に一人の生徒、その大きな書物を机の下て開いて



見ながら、コツ〳〵とカンニングをなし居るを見て、君はソット後の方へ廻りて、トンと其の生徒の背を叩き、「どうだ遣つてるな」と、言ひしまま、何とも言はず笑うて居しかば、それより君は大に生徒の氣受よくなりしといふ。

鳥尾中將伊藤侯を凹す

或る時山縣元帥、伊藤侯と共に、鳥尾中將の高田の庵室に會して大に宗教を論ぜし時、伊藤侯中將に向ひて「君はとうから禪學に志して大變熱心だそうだが、なぜ髪を殖て衣を着ないのか」と暗に冷評せしかば、中將笑ひながら「侯は近頃宮内省に入つて、頻りに神祇の事に世話を燒かれるそうだが、どうして烏帽子垂衣を着て、神主の樣な眞似をしないのか」と、反問せしかば、流石の伊藤侯も遂に一言なかりしとぞ。

滑稽百話　終

明治四十二年十月廿九日印刷
明治四十二年十一月一日發行
正價金三十錢
不許複製
編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目拾六番地　大月隆
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目三番地　木村弘
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目三番地　株式會社秀英舍第一工場
發兌元　東京市神田區錦町一丁目十六番地　文學同志會
大阪市江戸堀南通一丁目　文學同志會大阪支部

東京新滑稽

▲毎月廿五日發行▼

一冊定價十錢
一ヶ年一圓二十錢
郵稅一冊一錢宛

苦界の生活に快感の趣味を得んとする紳士の好伴侶

發兌元

東京市神田區錦町二丁目十六番地

東京滑稽社

電話本局 一八八一
振替番號 六九二六

328
74

84
10

33
74

091710-000-0

328-74

滑稽百話

加藤　教栄／著

M42

DBO-0183